

きもの文化塾に参加して

師走の声を聞きながら十二月十八日 京都生活工芸館 無名舎において

無名舎 主宰 吉田考次郎氏による「まぼろしの朝鮮毛綴」のお話を聞かせて頂きました。正直私は初めて聞く言葉でした、朝鮮毛綴 とは、祇園祭の山鉾町に口頭伝承されてきた毛織物の呼名とか、是非ともお話を聞きたいと思いました。

当日、無名舎は京町家そのままの奥に長く昔そのままと云えるような薄暗い電灯の元、足の下から寒さが伝わる暖房の無い部屋でしかし、

何時しかお話を聴いている間に寒さも忘れ十八世紀にタイムスリップしたかの様にお話を聞き入ってしまった。

毛綴は祇園祭 山鉾の胴体部に懸装した物で西暦1500年に再興された山鉾の保存会が所有していて、その数は約30点しか現存しないと、世界の博物館にも所蔵されていないとの事

この毛綴が日本に伝わったのは朝鮮王朝との交易を盛んにしていた対馬藩を介して京にもたらされたもの、その時代のもものは堅牢度が悪く、本来は紅色だったものがベージュ色に眼光鋭いライオンの目、鶴、鳳凰、獅子、牡丹や蓮の花と、全て吉祥文様身分の高い方々の身の回りに置かれ使用された厄除けに繋がる物だと思いました。

中には、獅子が戯れている中央に毛玉の中に子獅子が、毛玉から子獅子が生まれる様子など、心温まる絵柄、綴織その手触りはとてもガサガサしたもので羊等の堅い毛を使って織られたと、何世紀も前の物を手で、目で、足で、感じながら、とても有意義な時間を有難う御座いました。

前田 千賀子

朝鮮毛綴はベージュ色

清島誠子

朝鮮王朝から贈られた、真赤な色だったはずの手触りは決して良いとはいえないベージュ色の獣の毛の敷物。室町時代（足利義持）に贈られた品として、虎や豹の毛皮と共に、一枚もの雑彩花席と記されている。古様毛綴は、今は、毛段通と呼ばれているのであろうと、匿名舎の吉田孝次郎氏は語られる。

朝鮮王朝でハングルを創始した頃に、外交、国の特別な催しにしかこれを使用することを禁ずるべしとあった特別な品物。作られたはずの韓国には、現在はソウルの刺繍博物館に、赤地に描絵の毛綴が2枚、しかし、ここ、吉田氏の所蔵は、デパートの売場かと思われるほどの枚数。ここでは、一般的な展示の触ることのできない美術品ではなかった。触ってみて下さい。獣毛のザラザラ感がゆかってもらえると思います。今は、ベージュ

ユにみえていゝる色は、当時は真赤な鮮やかで、色だつたのが、植物染料による退色のためベシジニなつてしまつたのであつたとの説明。その絨毯とされるものは、手触り、色といひ、まるで麻袋のようだつた。現在の絨毯といふぬる品とは比べようもなかつた。しかし、絵柄は作られた時代には鮮やかで、織と手描との一級品であつたううと想像かゞできる。

両面に柄、彩色のある品は、間仕切り、片面の品は敷物に使用されたとのこと。これを

京都の町衆は、正月の玄関に敷いたと言う。当時このぬをみた町衆は、「この赤色は、目に鮮やかですな」こんな品を手になされるくらいにお店は繁盛しはつたんですななどと。お互いの賤を町家の「設い道具」として用いた。また、京近郊の祭礼幕にも用いられるようになったという。朝鮮王朝では、特別扱ひされた品を、正月の玄関の一番目につく、まして敷物にするほど、壁に飾るのであれば、また良いが敷物として足で踏むという。

とれだけ、京都の町衆の心意気、経済力があったのだらうか。

麻袋に似た手触りの品があるかと思えば、
第二次世界大戦時に、満洲から持ちかえった
と父が言っていた毛布に似た手触りの片面柄
の敷物と思える品もあった。

朝鮮では、数少ない品が、ここだけでも97
枚と数えると、吉田氏。

珍し物好きの町衆の心意気と垣間見る時間
であった。